

アーティストが考える「都市」とは？

都市のヴィジョン

— Obayashi Foundation Research Program

イム・ミノク「Hyper Yellow」

2024年3月1日（金） - 12日（火）



イム・ミノク《東海史》（スチル写真）2024年、3チャンネルビデオ、8分45秒

この度、公益財団法人大林財団が2017年から隔年で行ってきた助成事業《都市のヴィジョン》第4回助成対象者イム・ミノク（Minouk Lim）の展示「Hyper Yellow」を駒込倉庫にて開催いたします。

韓国のアーティスト、イム・ミノクは、ジャンルの拘束と規定からの脱却を試みるパフォーマンス形式を通じて、「消えたもの、見えないものを追跡」する美的実践を続けています。輸送手段を用いるパフォーマンスやそれをベースにした映像、放送機材をモチーフにしたインスタレーション、日用品や有機物を素材とするオブジェなどの作品を通して、近代性とアイデンティティへの問い、共同体と記憶、時間と空間に隠蔽された場所への思索を重ね、歴史と環境から派生した時間の断片を探ります。

イムの代表作の一つである《ポータブルキーパー》シリーズ（2009-）は、破壊と喪失、忘れられた時空、そして犠牲者への哀悼と記憶の復元のための祭儀的オブジェです。古代のシャーマンが用いる杖を思わせる本作には、扇風機の羽根やフェイクファーのような人工物、鳥の羽やイカの骨などの自然物が使われており、それぞれ喪失感やトラウマといった複雑な感情を治癒する意味が込められています。また、2009年の《S.O.S - Adoptive Dissensus》など、観客をパフォーマンスの一部として組み込んだ、演劇的とも言えるツアー型の作品では、開発と保存、人間と都市といった現代社会が直面している様々な政治的かつ現実的な問題を鋭く取り上げています。

本展は、イムの2年間にわたる日本でのリサーチとクリエイションの成果として、ドローイングとオブジェ、映像インスタレーションを含むおよそ20点の新作を発表するものです。

今回、イムは、日本における祭儀に現れる平行する世界と流動的な境界に着目し、歴史、国家、信仰、そして生態学的・地理的感覚の再編成を試みました。

展示のタイトル「Hyper Yellow」、つまり「黄色を超越した」状態は、特定の色や人種を指す言葉を越え、どこにも存在しないが、どこにでも存在する境界線の意味を問いかけます。その黄色を表現したドローイングと新作《ポータブルキーパー》は、テラコッタの粉を使って制作されました。1,100°Cで焼かれたテラコッタを粉碎し、散布し、乾燥させる作業を繰り返すことで完成した本作の黄色は、炎を象徴するかのようです。

ドローイングや文字の作品には、スポンジ、パラフィン、ブイとともに、イムにとって重要な素材の一つであるイカの骨が登場します。誰でも海辺で見つけられる、取るに足りないイカの骨は、人類の祖先のように、時にはエイリアンのように、境界を遡る存在です。イムはイカの骨に刻まれた微細な波紋を観察し、作品に施すことで、それが海の指紋であり言語であると私たちに仄めかします。

映像作品《東海史 (East Sea Story)》は、イムが屋形船で撮影した東京の夜景、東大寺の火の祭典「お松明」と水の祭り「深川八幡祭り」を撮影した映像に、3D グラフィックやアニメーションを組み合わせた観光ドキュメンタリーとなっています。この作品では、見慣れたものと見知らぬもの間を常に行き来しながら街を旅する観光客の視点によって、観客に最も具体的な瞬間と最も抽象的な経験を同時に与えることを試みます。

イムは今回、私たちが架空の観光客またはエイリアンとなり、新たな感覚で、移動や越境によって形成されてきた日本の宗教と文化が息づく都市に触れることを促します。

展覧会概要

タイトル：イム・ミヌク「Hyper Yellow」

プレビュー：2024年2月29日（木）16:00- *作家在廊予定

会期：2024年3月1日（金）- 3月12日（火）12:00-20:00

会場：駒込倉庫（東京都豊島区駒込2-14-2）

入場料：無料

同時開催イベント

・パフォーマンス「S.O.S - 走れ神々」

会期：2024年3月2日（土）、3日（日）17:00-18:30

会場：隅田川屋形船（「越中島棧橋」発着、東京都江東区越中島1丁目先越中島公園内）

無料・要予約 *受付は終了しました

・トークイベント

本プロジェクト開催にあわせて、イム・ミヌクのトークイベントを開催します。

日時：2024年3月4日（月）17:00-18:30（開場16:30）

会場：（株）大林組30階レセプションルーム

（東京都港区港南2-15-2 品川インターシティB棟30階）

無料・要予約 *受付は終了しました

作品について

「Hyper Yellow」

観光客は常に二重の視線を装着したまま街を旅する。空と地の間で近いものと遠いものを同時に捉えながら、見慣れたものと見知らぬものとの間を往復する。彼らは政治的な関心がなく、言語的なコミュニケーションがなくても、包容性と慈悲を与える神のように、風と共にやってきては雲のように散っていく。自分が知っているものと知らないものを比較しながら意識の転換を図ろうとする観光客にとって、都市は常に一步下がった存在である。これは都市と川の水の関係に似ている。お互いに絶え間ない変化と流れの中で、決してすべてを教えてくれず、一部にのみ参加し、イデオロギーを超越する。なぜ川辺にはいつも走る人がいるのか、手を振る人たちは誰を見送るのか、私に別れを告げるのか。松尾芭蕉とパリの恋人たち、十一面観音が平行する世界は、最も具体的な瞬間と最も抽象的な視点を同時に贈る。これは、観光客が複数の世界の間で自分の人生を振り返り、新たな飛躍を得ようとするとき、過去と未来の間で微妙に気づく方向性のようなものだ。屋形船は最後の箱舟以後の放浪を提案する。歴史は友情と信念を守ろうと走る者たちが立てる都市の煙のようなものだからだ。

イム・ミノク

作家略歴

イム・ミノク

アーティスト。映像、インスタレーション、パフォーマンス、音楽など、様々な表現手段を取り入れ、思考の幅を拡張して、ジャンルやメディアの境界を超えた多様な作品を制作。急速な社会経済的な発展、再開発とその結果として生じるコミュニティの移動など、社会、マスメディア、政治と市民の関係といったテーマに、長期的に取り組む。その創作は、歴史の喪失、断絶、抑圧されたトラウマを想起させる。2014年より韓国芸術総合大学で教鞭を取る。



© Minouk Lim

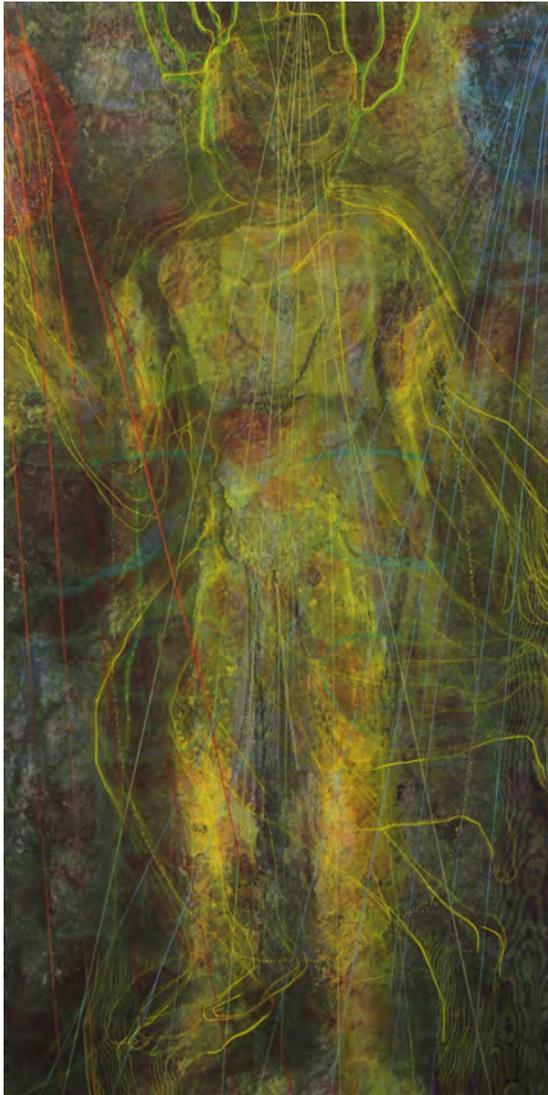
主な個展に「Minouk Lim – The Promise of If」

(PLATEAU サムスン美術館、ソウル、韓国、2015)、「United Paradox」(Portikus、フランクフルト、ドイツ、2015)、「Heat of Shadows」(ウォーカー・アート・センター、ミネソタ、アメリカ、2012)、「Perspectives」(スミソニアン国立アジア美術館 アーサー・M・サックラー・ギャラリー、ワシントンDC、アメリカ、2011)、「Jump Cut」(アートソングセンター、ソウル、韓国、2008)など、グループ展にDMZ Open Festival「DMZ Exhibition: Check Point」(キャンプ・グリーブス他、韓国、2023)、「Night Shift : 2021 Title Match Minouk Lim vs. Young Gyu Jang」(ソウル市立北ソウル美術館、ソウル、韓国、2021)、第13回光州ビエンナーレ、GB コミッション(光州旧国軍病院、光州、韓国、2021)、「他人の時間」(東京都現代美術館、2015)などがある。この他、アジア・パシフィック・トリエンナーレ(ブリスベン、2021)、リヨン・ビエンナーレ(2019)、あいちトリエンナーレ(2019)、シドニー・ビエンナーレ(2016)、瀬戸内国際芸術祭(2016)、光州ビエンナーレ(2014、2021)、パリ・トリエンナーレ(2012)、リバプール・ビエンナーレ(2010)など数多くの国際展に参加。

パブリックコレクションとしては、リウム美術館(ソウル)、グッゲンハイム美術館(アブダビ)、テート・モダン(ロンドン)、SF MoMA(サンフランシスコ)、ロサンゼルス・カウンティ美術館、ウォーカー・アート・センター(ミネソタ)、韓国国立現代美術館(ソウル)、ソウル市立美術館、アートソングセンター(ソウル)などがある。

ウェブサイト：minouklim.com

作品画像



《变化した顔》

2024 年、263x129cm、木製パネル、印刷された絹布、アクリル絵具

The Changed Face

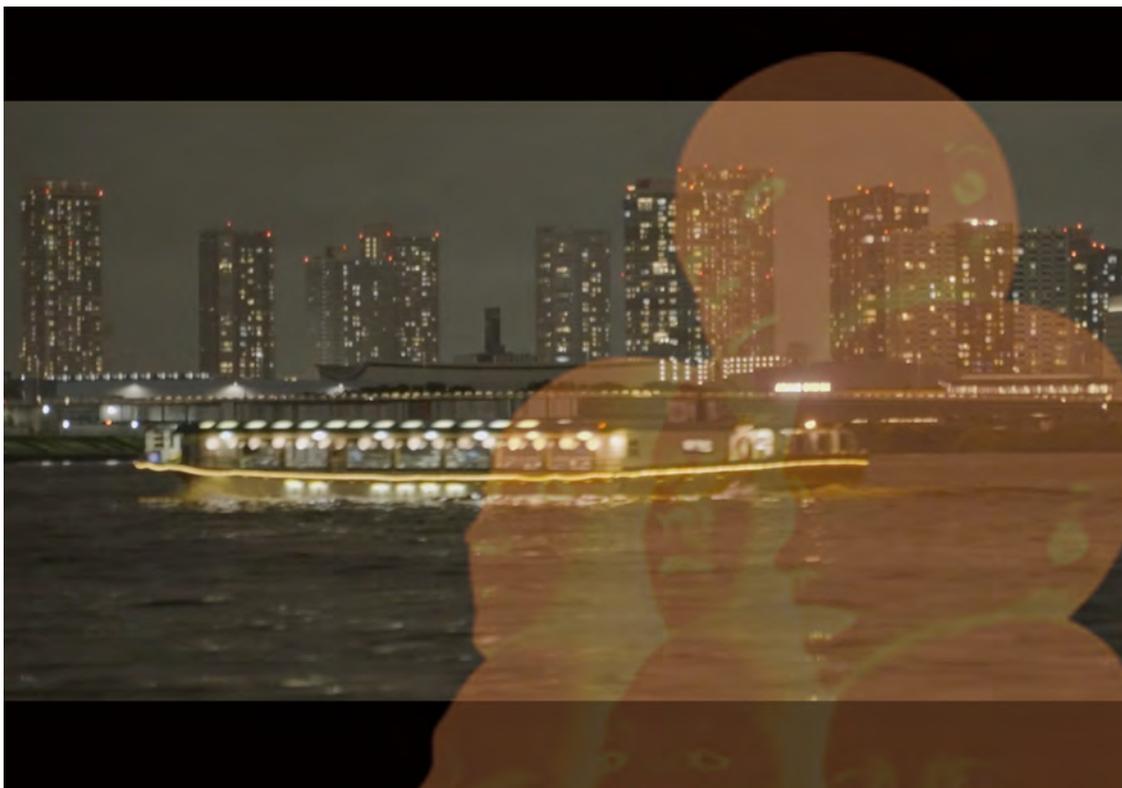
2024, 263x129cm, Wood Panel, Printed Silk, Acrylic Paint



《東海史》(スチル写真) 2024 年、3 チャンネルビデオ、8 分 45 秒
East Sea Story (Video still), 2024, 3 Channel Video, 8min. 45sec.



《東海史》(スチル写真) 2024年、3チャンネルビデオ、8分45秒
East Sea Story (Video still), 2024, 3 Channel Video, 8min. 45sec.



《東海史》(スチル写真) 2024年、3チャンネルビデオ、8分45秒
East Sea Story (Video still), 2024, 3-Channel Video, 8min.45sec



《西海ポータブルキーパー》
2024年、テラコッタパウダー、木、カラスプレー、
ウッドシール、ホース

West Sea Portable Keeper
2024, Terracotta powder, wood, color spray, wood
seal, hose



*参考画像: 《S.O.S - 走れ神々》パフォーマンスコンセプトドローイング 2024年

*Reference image: *S.O.S - Run Shin Shin* Performance concept drawing, 2024

《都市のヴィジョンー Obayashi Foundation Research Program》について

この財団は、1998年9月に、「財団法人大林都市研究振興財団」として設立されました。その名前が示すとおり、都市に暮らす人々に豊かな生活をもたらすような都市づくりを実現するために研究活動に従事されている方々への支援を通じてわが国の都市研究の発展を後押ししようと微力ながら努力してきました。2010年9月に内閣府から公益財団法人として認定していただき、2011年9月に現在の「公益財団法人大林財団」の名称に変更しましたが、同じ基本理念を貫いて来ました。

日本は、戦後復興を経て高度経済成長を達成し、物質面ではかなり豊かになり、都市環境も効率的で利便性の高いものとなりました。しかし、豊かになったと言われる日本の都市も、そこで日常生活を営む人々の心も本当に豊かになったかと言えば、答えに窮するところです。戦後しばらく日本は戦争で焼きつくされた国土を復興させるのに必死でしたし、他に類を見ないほど自然災害の多い国であることを考えれば、まずは国民の生命を守る頑強なインフラの構築が長い間国の使命であったことは頷けます。

また一方で、世界を見ると、貧困にあえぐ地域が多数存在し、その人たちにとってはその地域のどのような施設も生きてゆくための手段でしかありません。さらに、これは世界中で言えることですが、都市への過剰な人口集中、自動車の普及や産業の集積などによる大気汚染、自然環境の喪失、温暖化ガスによる異常気象の発生などの諸問題が生じました。近年日本では、少子高齢化に伴い人口が減少する中で空き家の放置や孤独死といった社会問題も起きています。

そこで、人々に豊かな生活をもたらすような都市づくりというものを再考し、人との交わりという部分で都市を研究することに何らかの貢献ができないか。都市があり、人がいて、そこでの様々な関わり、例えば芸術、経済、環境、歴史など都市と人間に関係する幅広い分野での研究を支援しようと考えたわけです。

この助成事業では、都市工学や都市の専門家ではなく、豊かで自由な発想を持ち、さらに都市のあり方に強い興味を持つ国内外のアーティストにお願いし、都市における様々な問題を考察し、住んでみたい都市や新しい、あるいは、理想の都市のあり方を研究してもらうこととしました。

考えてみれば、都市というテーマを研究したり考察したりするアーティストを支援している組織というものはこれまでなかったと思います。それに応えるのが、この《都市のヴィジョンー Obayashi Foundation Research Program》という助成事業です。

公益財団法人 大林財団
理事長 大林剛郎

推薦選考委員

選考委員長：野村しのぶ 東京オペラシティアートギャラリー シニア・キュレーター

選考副委員長：保坂健二郎 滋賀県立美術館 ディレクター（館長）

選考委員：飯田志保子 キュレーター／大坂紘一郎 アサクサ 代表／藪前知子 東京都現代美術館 学芸員

委員長コメント

パンデミックによる混乱を経験した後、社会が少しずつ日常を取り戻していくなかで、第4回助成対象者の選考が始まりました。アーティストによる都市のあり方の自由な研究・考察を支援する本助成は、私たちが経験したさまざまな困難や制約を思い起こすとき、その意義と可能性がますます実感されるものとなりました。

このたびの選考では、変革期の只中にある現状を意識しつつ、より広い視野で都市と社会に向き合い、ひとつの解に収斂されることのない実践が期待されるアーティストに注目しました。加えて、これまでも候補に挙げたものの採択に至らなかった地域のアーティストを選出したいという委員の総意もありました。過去3回の選考においてまだ選ばれていない、(単独で活動する)女性アーティストを優先したいという意見もあり、これらの議論の結果として、韓国出身・在住のイム・ミヌクが選出されました。

活動の初期から、自国の急速な民主化・近代化および都市開発がもたらしたコミュニティの分断や歴史の喪失をテーマに作品を制作してきたイム氏は、困難にあってなお人々に潜在する連帯への希求とそれが持つ可能性を、綿密なリサーチと多彩なアウトプットによって詩的かつ大胆な表現へと昇華させてきました。

イム氏は、韓国ではコミュニティの精神的な支柱となる信仰や伝統が失われてしまったと感じています。それに対し、日本の祭りではそれらが継承されていることに大きな関心を寄せ、本助成のリサーチの起点としました。とりわけ水と火にまつわる古来の儀式を調査し、東京の河川と架空の海を接続させることによって、歴史や社会が規定してきた枠組みや境界の存在、そして本来的には自由にたゆたう水が示すものごとの両義性を照射します。参加型パフォーマンスツアーおよび展覧会としてリサーチの成果を発表したいという提案からは、探求の先にある答えがひとつではないことと、多義性を許容する姿勢が印象的で、硬直化した現代社会からの脱却と未来のために私たちが進むべき道＝ヴィジョンを提示してくれるアーティストであると考えました。

野村しのぶ

お問い合わせ

[助成事業についてのお問い合わせ]

公益財団法人大林財団

〒104-0045 東京都中央区築地 1-12-22 コンワビル 13F

TEL: 03-3546-7581 / FAX: 03-3546-7582

E-mail: obf-zaidan@obayashi.co.jp

[取材・広報用画像についてのお問い合わせ]

特定非営利活動法人芸術公社

E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

TEL: 050-5358-8561 (受付時間: 開催期間中の土日を除く 10:00-18:00)